

2023(令和5年) NHK大河ドラマ

「どうする家康」

作・脚本：古沢良太

<前半の筋書き>

- ・三河の岡崎城主・松平広忠の子として生まれた松平元康(のちの家康)は戦乱で父を失い、母とも離れ、駿河の大国・今川家のもとで人質として暮らしていた。
今川義元に見込まれた元康は十分な教育も受け、やがて今川家重臣・関口氏純の娘・瀬名と恋に落ちる。そんな今川家に染まる姿を、元康に付き添っていた石川数正、鳥居元忠ら三河の者たちは苦々しく思っていた。
- ・ある日、父の墓参りに三河・岡崎を訪れた元康は、そこで父に仕えていた酒井忠次など旧臣たちと再会。彼らが今川家に不満を抱き、松平家再興の思いがくすぶっていることを知る。
- ・1560年(永禄3年)、今川義元は、織田領である尾張へ進撃する。元康は妻子たちに別れを告げ、織田軍の攻撃を受ける大高城に、兵糧を送り込む任務に就いた。
敵方の猛攻をくぐり抜け、大高城にようやくたどりつき、喜んだのもつかの間、桶狭間から衝撃の知らせが届けられる！ 大高城に押し寄せるのは、あの織田信長！
- ・織田軍に包囲される中、家族が待つ駿河に戻るか、故郷の三河へ進むか、それとも籠城か。
”どうする家康！” この決断が、壮絶な家康の人生の幕開けだった。
- ・一枚岩ではない家臣団を、どのようにまとめ、天下を取りに行くか！！

< > = ドラマでの俳優

*下線の人物 = 下記参照

*主人公 = 徳川(松平)家康 <松本 潤> □ 幼名:竹千代 → 元信 → 元康 → 家康

- ・天文11年(1542)12月、松平広忠(岡崎城主)と於大の方(水野忠政の娘)の嫡男として誕生。
- ・天文13年(1544)、母の父・水野忠政の没後に家督を継いだ母の兄・信元が今川氏と絶縁して織田氏に従ったため、今川氏に庇護されている広忠は、母・於大の方と離縁する。
於大の方は、その後、信元の意向で、坂部城主・久松長家(俊勝)に再嫁し、3男3女を。
- ・天文16年(1547)8月、竹千代は今川氏へ人質に出される。護送途中に義母の父が裏切って織田信秀に送られるも、2年後に織田信広との人質交換で駿府の今川義元のもとへ。
- ・遠江、三河へ進出し、尾張の織田氏とも対立していた今川義元は、武田・北条両氏との関係修復の上、新たな盟約を結ぶため、天文23年(1554)、義元の子・氏真の妻として北条氏康の娘・早川殿を迎えた。<三国同盟 → 永禄10年(1567)破綻 = 氏真が甲斐への塩止め>
(注) 天文21年 = 今川義元の娘が 武田信玄の子に、翌年 = 武田信玄の娘が 北条氏康の子に)
- ・天文24年(1555)3月、駿府の今川氏の下で元服して「元信」と名乗り、今川義元の姪で関口氏純(親永)の娘・瀬名(築山殿)を娶る。(名を「元康」と改める)
- ・永禄元年(1558)2月、今川氏から織田氏に通じた寺部城とその周辺攻め(初陣)、この戦功で、今川義元から旧領地の一部を返付され、腰刀を贈られた。
その翌年には、岡崎の家臣団との間で、主従関係を再確認する定書を交わした。
- ・永禄3年(1560)5月、「桶狭間の戦い」で先鋒を任され、大高城の鶴殿長照が城中の兵糧が足りないことを義元に訴えたため、義元から兵糧の補給を命じられた。
この戦いで、今川義元が織田信長に討たれた際、大高城で休息中であった元康(後の家康)は、大高城から撤退して松平家の菩提寺である大樹寺に駐屯し、住職の登誉上人と相談の上、今川方が危険を感じ撤収した岡崎城に入って、今川からの独立を果たそうとする
また、今川氏から自立し織田氏と同盟した元康は、久松長家と於大の3人の息子に松平姓を与えて家臣とし、於大を母として迎えた。

- ・永禄4年(1561)4月、元康は東三河における今川方の拠点であった牛久保城を攻撃、今川氏からの自立の意思を明確にした。この時、元康には、今川氏の盟友であった武田信玄、北条氏康が長尾景虎(上杉謙信)の関東出兵(小田原城の戦い)への対応に追われており、武田・北条からの援軍は来ないという判断があったとされる。
- ・永禄4年(1561)、先に今川氏を見限り織田氏と同盟を結んだ伯父・水野信元の仲介もあって信長と和睦し、今川氏と断交して信長と同盟を結び、三河の国を平定する。〈清洲同盟〉
- ・永禄5年(1562)には、家康が信長と会談し、同盟の確認をして関係を固め、翌年には、義元からの偏諱である「元」の字を返上して元康から家康と名を改めた。(家は源義家の「家」?)その3月には、同盟の証として、嫡男・信康と信長の娘・五徳との婚約が結ばれる。
- ・永禄7年(1564年)、三河一向一揆が勃発するも、苦心の末にこれを鎮圧。さらに永禄9年までには東三河・奥三河を平定して三河国を統一し、西三河衆(旗頭:石川数正)・東三河衆(旗頭:酒井忠次)・旗本の三備の制への軍制改正を行った。
- ・永禄9年(1566)、従五位下三河守に叙任され、「徳川」に改姓。(「松平」の祖=「徳川 義季」)
- ・永禄10年(1567)5月、長男・竹千代(後の、信康)に信長の娘である徳姫と結婚させ(共に9才)、岡崎城で暮らさせる。同年6月に、家康は浜松城に移り、岡崎城を長男・竹千代に譲った。竹千代は、7月に元服して信長より偏諱の「信」の字を与えられて、「信康」と名乗る。
- ・永禄11年(1568)12月、甲斐の武田信玄が今川領駿河への侵攻を開始すると(駿河侵攻)、家康は酒井忠次を取次役に遠江割譲を条件として武田氏と同盟を結び、遠江の今川領へ侵攻して曳馬城を攻め落とし、遠江国で越年する。
- ・永禄12年(1569)5月、今川氏真の掛川城を攻囲。籠城戦の末に開城勧告を呼びかけて氏真を降し、遠江国を支配下に置く。氏真と和睦した家康は北条氏康の協力を得て武田軍を退ける。
- ・元亀元年(1570)、岡崎から遠江国の曳馬城に移って、ここを浜松と改名し、浜松城を築いてこれを本城とする。
- ・信長と反目した將軍・足利義昭が武田信玄、朝倉義景・浅井長政・石山本願寺ら反織田勢力を糾合して〈信長包囲網〉を企て、家康にも副將軍への就任を要請したが、家康はこれを黙殺して、信長との同盟関係を維持した。(家康は北条氏と協調し武田領を攻撃していた。)
- ・元亀3年(1572)10月、武田氏が徳川領である遠江国・三河国への侵攻(西上作戦)を開始、徳川軍は天竜川を渡って見附(磐田市)にまで進出し、武田軍の動向を探るために威力偵察に出たところを武田軍と遭遇して、一言坂で敗走し、12月には、二俣城を攻め落される。さらに三河国に侵攻する武田軍を追撃した徳川軍は惨敗し、鳥居忠広ほか1000人以上の死傷者を出す。家康は、身代わりとなった家臣に助けられて命からがら浜松城に逃げ帰った。帰城して冷静さを取戻した家康は、「空城の計」を用いることによって武田軍にそれ以上の追撃を断念させたとされている。〈二俣城の戦い → 三方ヶ原の戦い〉
(「空城の計」=あえて自分の陣地に敵を招き入れることで敵の警戒心を誘う計略)
- ・翌年に入り、三河国への進軍を再開した武田軍によって野田城が落とされたが、信玄の発病によって武田軍は長篠城まで退き、信玄の死去により撤兵した。(家康は信玄の死去に疑念を抱いて、武田領である岡部に侵攻・放火する等武田軍の反応をみたが、武田軍の抵抗がほとんどなかったことから信玄の死を確信した。)
武田氏の西上作戦の頓挫により、信長は反織田勢力を撃滅し、家康も勢力を回復して長篠城から奥三河を奪還し、駿河国の武田領まで脅かした。

- ・これに対して信玄の後継者である武田勝頼も攻勢に出て、天正2年(1574)には遠江高天神城を攻略し、家康と武田氏は攻防を繰り返した。天正3年(1575)5月の“**長篠の戦い**”で武田軍を退け、諏訪原城を奪取して高天神城へ補給路を封じ、武田氏への優位を築いた。
- ・天正7年(1579)、信長から正室・**築山殿**と嫡男・**松平信康**に対して武田氏への内通疑惑がかけられ、家康は**酒井忠次**を使者として信長と談判させたが、信長からの詰問を忠次は概ね認めたため信康の切腹が通達され、家康は熟慮の末、信長との同盟関係維持を優先し、築山殿を殺害し、信康を切腹させたという。(近年では築山殿の殺害と信康の切腹は、家康・信康父子の対立が原因とする説もある。)
- ・天正10年(1582)、信長は家康と共同で武田領へ本格的侵攻を開始し、同年3月、武田勝頼一行は自害して武田氏は滅亡した。家康はこの戦功により駿河国を与えられ、駿府において信長を接待している。
- ・天正10年(1582)、駿河拝領の礼のため、信長の招きに応じて安土城を訪れ際、秀吉からの援軍要請に対して信長は自ら出陣することを決めたため、家康もこれに従うこととし、帰国後に軍勢を整えて西国へ出陣する予定だった。6月2日、堺を遊覧中に京で“**本能寺の変**”が起こった。この時の家康の供は小姓衆など少数で、極めて危険な状態であったため、**本多忠勝**の説得と**服部半蔵**の進言を受け、伊賀国の険しい山道を越え加太越を経て伊勢から海路で三河国に辛うじて戻った。“**神君伊賀越え**”
帰国後、家康は直ちに上洛しようとしたが、秀吉が光秀を討った報を受けて引き返した。
- ・その後、家康は甲斐の国を攻略し、北条軍とも全面对決の末、和睦を行って(家康の次女・督姫が氏直に嫁ぐ)、縁戚・同盟関係を結び、甲斐・信濃・駿河・遠江・三河の5か国を領有する大大名にのし上がった。
- ・信長死後に光秀を討って台頭した羽柴秀吉は、天正11年(1583)には織田家筆頭家老であった**柴田勝家**を“**賤ヶ岳の戦い**”で破り、影響力を強めた。(この時、家康は戦勝祝いとして、秀吉に茶器を贈った。)
- ・天正12年(1584)、織田信雄(信長の次男)が、秀吉方に通じたとする家老を肅清した事件を契機に合戦が起こり、尾張国へ出兵し信雄と合流して小牧に着陣した家康軍と秀吉率いる羽柴軍との間で“**小牧・長久手の戦い**”が起こったが、全面衝突のないまま外交戦の様相となり、同年9月に和睦した。講和条件として、家康の次男・於義丸(結城秀康)が秀吉の養子となった。
- ・家康の豊臣政権への臣従までの経緯は『家忠日記』に記されているが、秀吉は家康に対してさらなる人質の差し出しを求め、徳川家中は**酒井忠次**・**本多忠勝**ら豊臣政権に対する強硬派と石川数正ら融和派に分裂し、同年11月には石川数正が出奔して秀吉に帰属する事件が発生する。この事件で徳川軍の機密が筒抜けになったことから、軍制を刷新し武田軍を見習ったものに改革したとされる。
- ・天正14年(1586)に入ると秀吉は織田信雄を通じて家康の懐柔を試み、臣従要求を拒み続ける家康に対して秀吉は実妹・朝日姫を正室として差し出し、秀吉と家康は義兄弟となる。さらに秀吉が生母・大政所を朝日姫の見舞いとして岡崎に送ると、家康は浜松から上洛し、大坂に到着、豊臣秀長邸に宿泊した。その夜に秀吉本人が家康に秘かに会いにきて、改めて臣従を求めたことから、家康は完全に秀吉に屈することとなり、大坂城において秀吉に謁見し、諸大名の前で豊臣氏に臣従することを表明した。この謁見の際に、家康は秀吉が着用していた陣羽織を所望し、今後、秀吉が陣羽織を着て合戦の指揮を執るようなことはさせない、という意味を示し諸侯の前で忠誠を誓った。(徳川実紀)

*家康の周辺人物

< >=ドラマでの俳優

「於大の方」<松嶋 菜々子> … 家康の母

わずか15歳で竹千代(家康)を産み、その3年後に、実家の水野家が松平家と敵対関係になったために離縁され、竹千代と生き別れに。その後も天下人となる家康を支えた大らかな母。(再嫁した久保長家が没後、剃髪して伝通院と号した。小牧・長久手の戦い後、子の松平定勝が羽柴秀吉の養子になるという話が浮上したが、強く反対し、家康に断念させた。また、慶長7年には、高台院や後陽成天皇に拝謁し、徳川氏が豊臣氏に敵意がないことを示している。慶長7年(1602)8月に家康の滞在する山城伏見城で死去した。)

「水野 信元」<角田 晃広> … 家康の母・於大の兄=家康の伯父

織田家に味方する三河の国人領主。乱世を渡り歩いた度胸とズルさの持ち主。時折、信長の代理と称して、家康のもとを訪れて脅しをかけ、ビビらせては楽しむ。(織田信秀は、信元の協力を得て三河に侵攻する。信長と家康が清洲同盟を結ぶ際にはその仲介役となっている。天正3(1576)年12月、武田勝頼側への内通や兵糧を輸送した疑いで、信長の命を受けた甥・家康によって殺害された。)

「久松 長家(俊勝)」<リリー・フランキー> … 家康の母・於大の再婚相手

織田家や水野家などその時々同盟相手を変え、時代の風を読んで、節操なく乱世を生き延びる。家康のもとに転がり込み、やがて徳川家のもとでヒモ同然で暮らす。(天正15年[1587]3月・没)

「築山殿(瀨名)」<有村 架純> … 家康の正室

今川家家臣・関口親永(瀨名義広)の箱入り娘。家康の初恋の女性で、信康と亀姫を授かる。信長との”桶狭間の戦い”を前に家康を笑顔で送り出すが、そこから彼女の運命が変わり始める。(天正7年、五徳の手紙が発端で、二俣城に護送中に徳川家家臣の手で殺害された。)

「徳川 信康」<細田 佳央太> … 家康の嫡男(幼名・竹千代)。母=築山殿

三方ヶ原の戦いで家臣の心をつかみ、家康の後継者としての地位を。心優しき勇敢な青年だが、そのまっすぐな気持ちも、危うさでもある。妻は信長の娘・五徳(徳姫)。(天正7年[1579]、妻の五徳が、姑の築山殿との折り合いが悪く、信康とも不和になったことを父・信長に手紙で知らせたことから、信長が家康に信康の切腹を要求し、二俣城で自刃させられた。)

「関口 氏純(親永)」<渡部 篤郎> … 今川義元の筆頭家老。瀨名の父

愛娘・瀨名にはめっぽう弱く、人質に過ぎない元信(のちの家康)との恋を容認、婚姻を後押しする桶狭間の戦いののち、家康が織田方に寝返ると、一転して今川家中で危うい立場に追込まれる。(永禄5年[1562]、家康が今川氏から独立したため、義元の嫡男・氏真からその去就を疑われ、駿府の屋敷にて切腹を命じられて果てた。)

「巴」<真矢 ミキ> … 瀨名の母

瀨名が格下の元信(のちの家康)と結婚することに反対するが、のちに良き理解者となる。

「たね」<豊嶋 花> … 瀨名と命運を共にする

関口家の侍女として、瀨名の世話をする。元康が織田方に転じたことで、瀨名と共に捕らわれの身となる。心細い瀨名にとっては、頼りになる家族のひとり。

「お田鶴」<関水 渚> … 瀨名と幼少からの友人。鵜殿長照の妹

瀨名の結婚を祝福し、のちに今川と徳川が敵対関係となっても、その友情関係は続いた。今川家の家臣・飯尾蓮龍に嫁ぎ、夫亡きあとは城主として曳馬城(のち浜松城)を守る。

「鵜殿 長照」<野間口 徹> … 今川家の重心。お田鶴の兄

今川と織田の激戦の中、大高城・城代として元康から兵糧補給の援護を受ける。(桶狭間の戦)その後、敵となった家康との一大決戦に臨み、服部半蔵の忍者部隊を翻弄する。

「於愛の方」<広瀬 アリス>

天正17年(1589)に38才で死去

家康の側室。2代将軍・秀忠の母。夫を戦乱で亡くし、幼子連れて側室となった苦勞人。

「松平 昌久」<角田 晃広> … 松平氏のひとつである大草松平家の当主

松平元康(のちの家康)が当主を務める松平宗家の地位をしたたかに狙う野心家。

岡崎城に戻った元康に服従しつつも、今川家や三河国衆たちと結びつき、転覆させる機会を伺う。

(永禄6年(1563)の三河一向一揆では反家康方に加わって東条城に籠城)

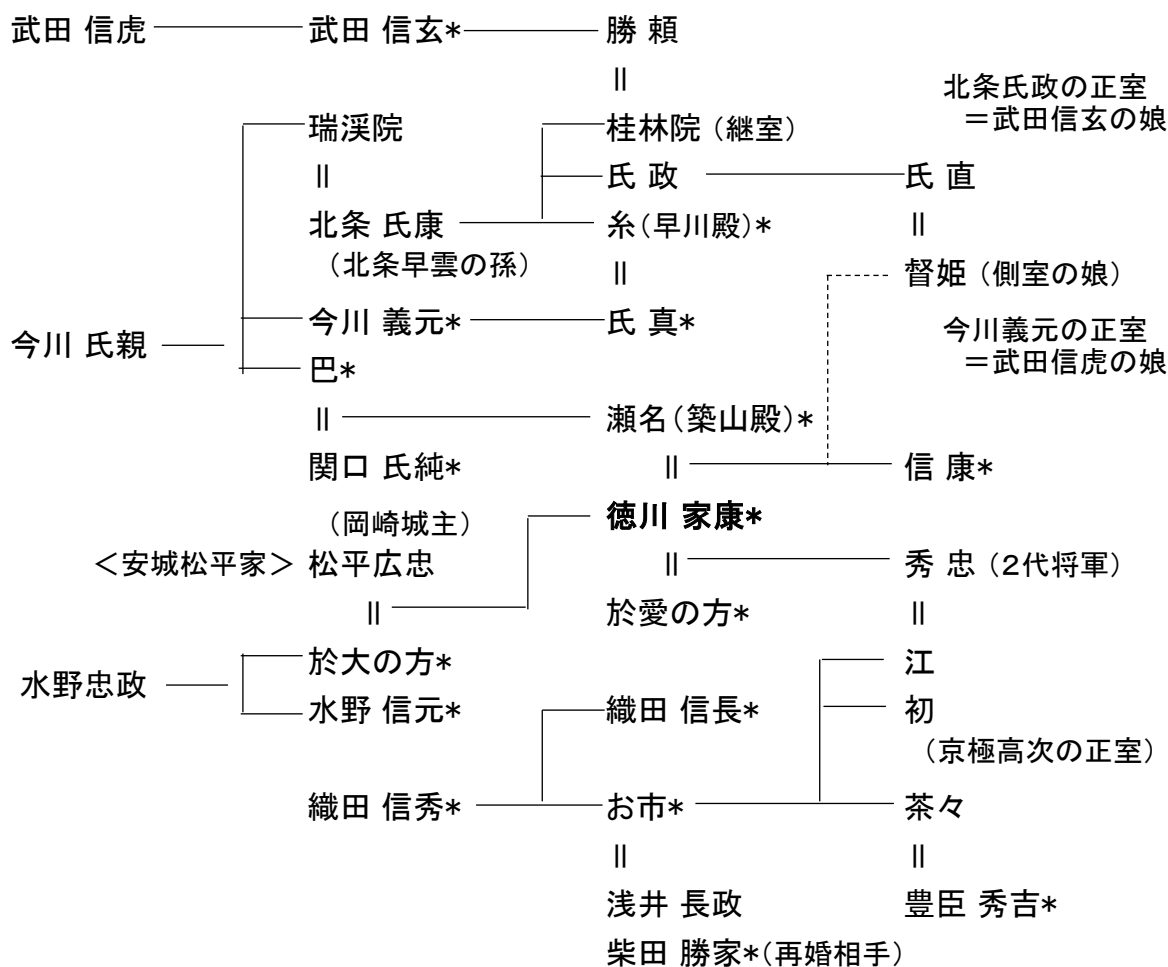
「登誉上人」<里見 浩太郎> … 松平家・菩提寺の住職

岡崎・大樹寺の頑固一徹な住職。彼の教えである「厭離穢土欣求浄土(オンリドゴングジョウト)」

は、生涯を通じての家康の精神的な支えとなり、徳川家の旗印になる。

< 相関図 >

*=ドラマ登場人物



*主な登場人物

< >=ドラマでの俳優

「織田 信長」<岡田 准一>

常識をくつがえし、常人離れした革新的な戦術を生み出す信長に、家康は必死に食らいつき、彼の知識を吸収してゆく。そんな家康に、信長はなぜか異様に目をかける。(本能寺の辺)

「織田 信秀」<藤岡 弘> … 信長の父

領地を広げ、織田家繁栄の基礎を築く。岡崎城主・松平広忠と対立し、幼少時代の家康(松平竹千代)を人質にする。

(天文18年[1549]の今川氏との戦いで、庶子・信広が今川氏に捕縛されたことで、人質としていた竹千代(家康)と交換が行われ、西三河での勢力を失う。天文21年死去。)

「お市」<北川 景子> … 信長の妹

織田と徳川が盟約を結ぶのをきっかけに、家康と数奇な運命を共にすることになる。

近江・浅井家に嫁ぐものの、兄・信長のせいで乱世の渦に巻き込まれる。

彼女が生んだ三人娘もまた、家康の生涯に大きくかかわることに……

(信長が浅井長政と同盟を結ぶための政略結婚で長政の継室となるが、信長が浅井氏と関係の深い越前国(福井県)の朝倉義景を攻めたため、織田家と浅井家は対立し、元亀元年[1570]6月の織田・徳川連合軍と浅井・朝倉連合軍の間で行われた”姉川の戦い”で浅井長政が敗北、天正元年[1573]に小谷城が陥落し、長政は自害した。3人の娘とともに織田家に救出され、柴田勝家と羽柴秀吉が申し合わせて柴田勝家と再婚する。天正11年[1583]、賤ヶ岳の戦いで敗れ、北ノ庄城に帰城した勝家とともに自害する。3人の娘は秀吉に救出される。)

「豊臣 秀吉」<ムロ ツヨシ>

家康最大のライバル。欲望のかたまりで、巧みに人の心に入り込む。家康が一番苦手なタイプ。

「今川 義元」<野村 萬斎>

家康が父のように心から尊敬する人物。

家康を乱世へと導いた駿河国大名。公家文化にも精通する教養人で、仁徳による王道政治を。人質として預かった聡明な家康に目をかけ、幅広い教養を身につけさせる。

(所領を駿河・遠江から、三河や尾張の一部にまで拡大させ、今川氏の最盛期を築き上げるも、尾張国に侵攻した”桶狭間の戦い”で織田信長軍に敗れ、毛利良勝(新助)に討ち取られた。)

「今川 氏真」<溝端 淳平> … 義元の嫡男

坊ちゃん育ちのプライド高い御曹司だが、義元が目をかける元信(のちの家康)にも、コンプレックスを感じている。桶狭間の戦いで義元が討ち死にしたことで、その運命が大きく揺らぐ。

(その後、家康の家臣となったが、慶長19年(1615年)12月、江戸で死去)

「糸(早川殿)」<志田 未来> … 氏真の妻(北条氏康の娘)

今川・北条・武田が三国同盟を結んだ折に、今川氏真に嫁ぐ(天文23年(1554年)7月)。

義元亡きあと、家臣たちの裏切りが相次ぐ中、孤独を極める氏真を支える。

(慶長18年(1613年)2月、氏真に先立って江戸で死去)

「武田 信玄」<阿部 寛>

戦国最強のレジェンド。家康のなすことすべてを先読みし、赤子の手をひねるようにたたき潰す。戦国を生き抜く厳しさを知らしめ、生前も死後も家康を苦しませ続ける。

(元亀3年[1572]、将軍・足利義昭の信長討伐令の呼びかけに応じる形で甲府を進発した信玄は信長・家康連合軍と各地を転戦、三河・野田城を落とした直後から喀血し、長篠城において療養していたが、元亀4年[1573]4月、甲斐に撤退する三河街道上で死去した。)

「山県(飯富[オブ])昌景」<橋本 さとし>

武田四天王の一人

若きころより信玄を支えた筆頭重臣。川中島合戦では最前線で指揮し、上杉軍と対決。

譜代家老の山県氏の名跡を継承。「赤備え」は武田最強部隊の代名詞

(天正3年(1575)の”長篠の戦い”では撤退を進言したが、武田勝頼は決戦を決断し、設楽原決戦で追撃戦での最中に戦死した。)

「柴田 勝家」<吉原 光夫>

「市」の再婚相手

織田家家臣。体は熊のように大きく、声は柱を壊すほどデカイ。小心者の家康をいつも怖がらせる。急進的な信長を全身全霊で支えるが、やがて秀吉とは袂を分かつ。

(天正11年[1583]、秀吉との賤ヶ岳の戦いで敗れ、北ノ庄城で自害。)

<徳川家臣団>

「酒井 忠次」<大森 南朋>

徳川四天王筆頭とされ、家康第一の功臣

家康の叔父で、三河個性派家臣団のまとめ役。時に宴会芸を始め、場を盛りあげる気遣いの人。

(桶狭間の戦いの後、徳川家の家老となり、家康の主な戦いには全て参加。天正13年(1585年)

に同じく家康の宿老であった石川数正が出奔してからは家康第一の重臣とされたが、天正16年(1588年)10月、長男の家次に家督を譲って隠居し、慶長元年(1596年)10月、京都で死去。)

「登与」<猫背 椿> … 酒井 忠次の妻

家康不在の岡崎城を裏方として支え、切り盛りする。瀬名や家康の母・於大の話相手。

「石川 数正」<松重 繁>

酒井忠次同様の古参の家臣で、家康が最も信頼する常識人。切れ味鋭い頭脳の持ち主で、遠慮なく正論を進言する。外交役も務め、戦国武将と渡り合う度胸の持ち主。

(姉川の戦い、三方ヶ原の戦い、長篠の戦いなど、多くの合戦で数々の武功を挙げ、天正7年に信康が切腹すると、岡崎城代となる。その後、松本藩藩主となり、文禄2年(1593年)に死去)

「本多 忠勝」<山田 裕貴> 徳川四天王の一人 のち伊勢桑名藩・初代藩主

”ただ勝つ”と名付けられた最強サムライ。義を重んじ、筋の通らないことは大嫌い。

(”本能寺の変”のあと家康を諫めて伊賀越えの途中、木津川を船で渡ったあと船の船底を槍の石突で突き破り、追手が使用するのを防いだとされる。慶長15年[1610]10月、桑名で死去。)

「本多 忠真」<波岡 一喜>

叔父として忠勝に武芸を徹底的にたたき込む。屋間から徳利を片手にするが、戦場では大活躍。

「榊原 康政」<杉野 遥亮> 徳川四天王の一人

文武に優れた若き武将。家康にその才能を見いだされる。(家康の伊賀越えにも同行)

「井伊 直政」<板垣 季光人> 徳川四天王の一人 遠江国井伊谷の出身。のち彦根藩主

井伊家(女城主・直虎)の嫡男。家臣団の新戦力として活躍。不遜な物言いでトラブルが絶えず。

「大久保 忠世」<小手 伸也>

面倒見のいいみんなの兄貴。(家康に謀反し浪人した本多正信の帰参を助ける。)

「本多 正信」<松山 ケンイチ> 江戸開府後は幕政の中枢に(老中)

大久保忠世の紹介で登用されるが、胡散臭いイカサマ野郎。やがて天下取りに欠かせない男に。

(三河一向一揆に与して鎮圧後に三河を出奔。後に許されて家康のもとへ帰参。)

「渡辺 守綱」<木村 昂>

「槍半蔵」とも呼ばれる大男。三河一向一揆では一揆側につき、家康に槍を向ける。

「夏目 広次」<甲本 雅裕>

家康を実務面で支える事務方の男。三方ヶ原の戦いでの最大の功労者。夏目漱石の先祖とも。

(”三方ヶ原の戦い”で、進言を聞かず決死の突撃をしようとする家康の身代りとなり、討ち死。)

「平岩 親吉」<岡部 大>

幼少より家康に付き添い、苦楽をともにする。苦しいときには特に重宝する男。

「鳥居 忠吉」<イッセー 尾形>

家康不在の岡崎城の留守を預かり、松平家再興を支えた長老。元忠・忠広の父。

(永禄3年(1560)、桶狭間の戦いでは家康に従軍し、岡崎城に入った若き主君・家康に、今まで蓄えた財を見せ、「苦しい中、よくこれだけの蓄えを」と家康に感謝されたという。その後は高齢を理由に岡崎城の留守を守った。元亀3年(1572)に死去。)

「服部 半蔵(正成)」<山田 考之>

命ぜられて伊賀忍者を使い、諜報活動をするが時々失敗する。

「大鼠」<千葉 哲也> … 服部半蔵に仕える忍者集団の長(オサ)

鼠のように這いつくばり、素早い動きをする。ふだんは農業を営み、身を隠す。

「女大鼠」<松本 まりか> … 大鼠の娘

父を継いで忍者集団を束ねる。体が柔らかく、遊女から武士まで演じる変装の名人。